熊本大学学術リポジトリ

ユア・フレンド活動の現状と今後の課題 ： 不登校児童生徒への新たな支援活動

著者	辻野 智二，大迫 靖雄，永山 博，堀川 治城，河上 強，三原 悟，白石 紗央里
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	53
ページ	145-151
発行年	2004-11-30
その他の言語のタイトル	The Present State of Your-Friends Activities and Future Subject : A New Supporting Project for Students of Long Absence from School
URL	http://hdl.handle.net/2298/1217

熊本大学教育学部紀要，人文科学
第53号，145－151，2004

ユア・フレンド活動の現状と今後の課題

― 不登校児童生徒への新たな支援活動 ―

辻野智二・大迫靖雄[*1]・永山　博[*2]・堀川治城[*2]
河上　強[*2]・三原　悟[*3]・白石紗央里[*4]

The Present State of Your-Friends Activities and Future Subject

― A New Supporting Project for Students of Long Absence from School ―

Tomoji TSUJINO, Yasuo OHSAKO [*1], Hiroshi NAGAYAMA [*2], Haruki HORIKAWA [*2]
Tsuyoshi KAWAKAMI [*2], Satoru MIHARA [*3], Saori SHIRAISHI [*4]

(Received October 4, 2004)

The factors and back ground of the problems of long absence from school are too complicated and diversify. In order to deal with the probrems, it is not easy to devise effective countermove. An increase of the number of students of long absence from elementary school and junior high school becomes a serious social problem. Your-Friends activities are developed two years ago, as support activities by university students and graduate school students, which are organized by Faculty of Education of Kumamoto University and Board of Education of Kumamoto City. In this work, the present state of Your-Friends activities and the evaluation of the activities are examined. Many elementary schools and junior high schools evaluate that the Your-Friends activities are available for children of long absence from school. The protectors of children and students may also evaluate as an useful project. Furthermore, the effectuality of the work is also recognized by the university students who participate in the activities.

Key words : Your-Friends activities, long absence from school, school education, communication with children, countermove of long absence from school

1. 緒　　言

わが国の学校教育における長年の生徒指導上の課題として，いじめ，不登校，校内暴力等が指摘されてきたが，ここ数年，いじめ，校内暴力については改善されつつある．しかしながら，小・中学校における不登校の児童生徒数の顕著な増加は，学校教育上極めてゆゆしき課題であると共に，卒業後のひきこもりの増加との相関も指摘されるなど，憂慮すべき社会的問題となっている．小・中学校における不登校児童生徒数は，現行の調査が開始された平成3年度以降増加の一途をたどってきたが，平成15年度学校基本調査速報結果[1]によれば，平成14年度の不登校児童生徒数は約13.1万人となり，前年度比で初めて減少となった．平成13年度，全国の国公私立の小・中学校において年間30日以上欠席した不登校児童生徒の在籍者比率[2]は，小学校0.36%，中学校2.73%であり，また不登校児童生徒が在籍する学校の全学校に占める割合は，小学校44.8%，中学校85.9%である．熊本市内の状況としては，平成13年度，小学校80校に在籍している児童数40,711名のうち不登校児童数は126名である．また，中学校37校の在籍生徒数は21,452名で，不登校生徒数は537名となっており，いずれも全国平均値と類似の傾向を示す．

不登校問題の要因・背景は近年，複雑・多様化し，その類型も精神医学，心理学及び現象学等の各分野で様々な分類法が提示されている[3]．一方，不登校問題への対応としては，これまで，スクールカウンセラーや心の教室相談員の配置，また適応指導教室の設置などの施策が講じられてきたが，容易に改善の兆しが見

*1　熊本大学
*2　熊本市教育委員会
*3　熊本市立北部中学校
*4　元教育学部学生

えぬまま今日に至っているのが現状である．

熊本大学教育学部と熊本市教育委員会とは，平成14年度より，学生・院生による不登校児童生徒への支援活動として，ユア・フレンド事業を展開してきている．これまで，学生による不登校支援活動としては，福井大学[4]や東京学芸大学[5]等における事例が散見する程度であり，今後の一層の展開が期待されている．ここでは，ユア・フレンド事業の現状及びその活動の評価等について検討したので，その結果を報告する．

2. ユア・フレンド活動の現状

ユア・フレンド活動は，子どもたちと年代が比較的近く，ものの考え方や価値観を共有しやすい学生が，不登校児童生徒に接しコミュニケーションを図ることにより，閉ざされた心のバリアーを低下させ，引きこもりの状態から歩みだすきっかけづくりを目的とする活動である[6-8]．学生は，ボランティア活動として，熊本市内の不登校児童生徒への支援活動を行うもので，児童生徒の家庭や学校の保健室，熊本市教育委員会のフレンドリー（適応指導教室）等を週1回2時間程度訪問する．学生の派遣にあたっては，年度当初にユア・フレンド説明会及び研修会を実施する．説明会では，ユア・フレンド実施要綱に基づき，ユア・フレンド活動の趣旨，派遣の進め方，役割，報酬等について説明する．研修会では，ユア・フレンド手引書に基づき，活動内容の守秘義務，熊本市ボランティア活動保険の説明・加入，家庭訪問等における注意事項等を説明する．また，学生に対してカウンセリングマインドに関する基礎的な研修を行う．なお，派遣する学生には，ユア・フレンドの身分を証明するIDカードを発行し，熊本市教育委員会が委嘱状を交付する．平成14年度，ユア・フレンド活動に参加した学生は84名であり，平成15年度の参加学生は約100名である．活動開始後，定期的に，学生・熊本市教育委員会・大学の3者による意見交換会等も行っている．

3. ユア・フレンド活動に関するアンケート調査と結果

3.1 ユア・フレンド活動の調査

平成15年度9月から10月にかけて，ユア・フレンド活動の評価に関する事項についてアンケート調査を行った．調査対象は，ユア・フレンド活動を活用している児童生徒が在籍する熊本市内の小学校9校と中学校22校，また，ユア・フレンド活動に参加している教育学部の学生24名である．

3.2 結果と考察

3.2.1 小中学校における調査結果

図1には，ユア・フレンド活動の対象となっている児童生徒の学年の割合を示す．小学校3年生から6年生までの割合が16%，中学生の割合が84%である．中でも中学校2年生の割合が35%と，最も多くなっており，次いで中学校3年生が32%を占めている．この小・中学生の比率は，熊本市内の不登校児童生徒数における小学校と中学校の割合19%と81%と類似する．

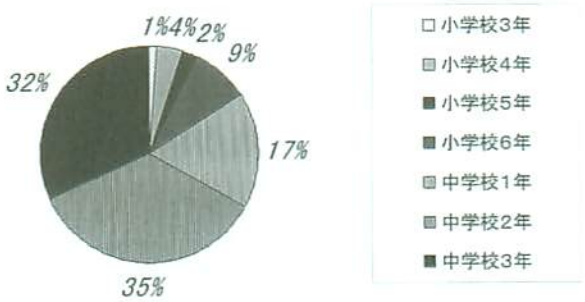

図1　児童生徒の学年

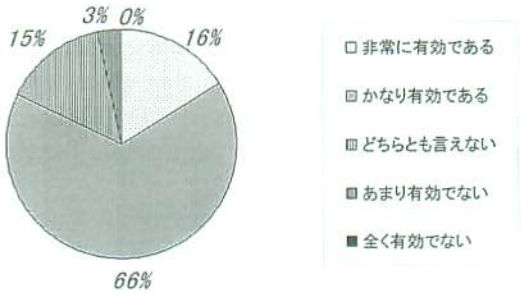

図2　対象児童生徒にとってユア・フレンド活動は有効か

図2には，ユア・フレンド活動の対象となっている児童生徒にとってユア・フレンド活動は有効か否かという質問に対して得られた結果を示す．「非常に有効である」と「かなり有効である」が合わせて82%に達しており，この活動の有効性を多くの小・中学校が認めていることがわかる．具体的には，「ユア・フレンドの学生は教師と児童生徒とのパイプ役になっている」「話し相手ができることで，児童生徒に明るさが戻り，表情豊かに話ができる」「学校へ行く意欲につながってきている」等の指摘があった．しかしながら，全体の15%が「どちらともいえない」，3%が「あまり有効でない」と回答しており，原因や背景が複雑化してきている不登校問題を取り扱うことの難しさが伺える．なお，アンケートにある，選択肢の「全く有効でない」という回答はゼロであった．

活動の対象となっている児童生徒だけでなく，一般的に不登校の児童生徒にとってユア・フレンド活動は有効かという質問に対する回答の結果を図3に示す．

「非常に有効である」と「かなり有効である」が合わせて84%に達し，図2の結果と同様に多くの学校がこの活動の有用性を評価している．一方，「どちらとも言えない」との答えも16%あった．なお，「あまり有効でない」と「全く有効でない」という回答はいずれも無かった．

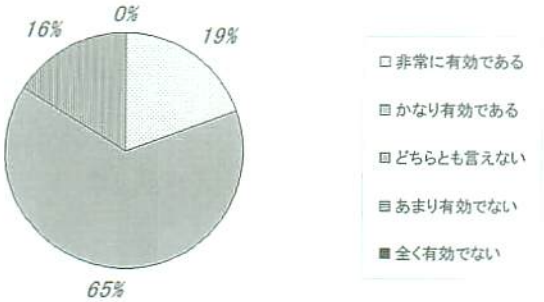

図3　不登校の児童生徒にとってユア・フレンド活動は有効か

図4には，学校側から見て，児童生徒の保護者がユア・フレンド活動をどのように評価しているか，についての回答の結果を示す．「高く評価している」と「かなり評価している」が合わせて72%に達しており，間接的な結果ではあるが，多くの保護者はこの活動に対して一定の評価をしているものと思われる．これに関連して，「普段，家でごろごろしがちな児童生徒のきちんとした生活リズムができた」「家族・教師のほかに，コミュニケーションをとる相手が増え，社会性の発達につながっている」等の意見が寄せられた．

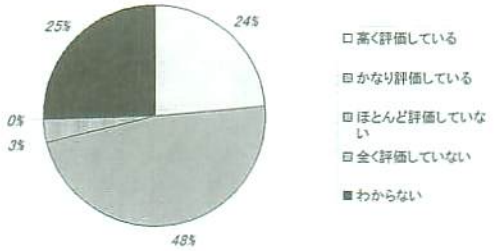

図4　児童生徒の保護者によるユア・フレンド活動の評価

また，ユア・フレンド活動に対する意見や感想等としては，「これからも熱心な学生を紹介してほしい」「継続して活動してもらいたい」「熱心に児童生徒のことについて考え，行動していただき感謝している」等，本活動や活動に参加している学生を評価する内容のコメントが見られた．一方，本活動の改善点については「不登校児は男子が多いので，今後，男子のユア・フレンドが増えてくれればありがたい」「学校と学生との情報交換の機会があればよい」「週1回を，できれば2，3回に増やしてほしい」「要望の多さに対して供給が追いつかないのだと思うが，もう少しのんびり変化を待てるようなゆとりがほしい」等の指摘があった．

3.2.2　学生から得られた調査結果

学生がユア・フレンド活動をしている実時間は2時間程度が70%であり，ほとんどの学生は1～2時間程度の範囲で活動を行っている．

図5には，ユア・フレンド活動に要する総活動時間（実際の活動時間，往復の時間等）を示す．2時間程度が26%，3時間程度が57%，4時間程度が17%を占めており，実際の活動時間よりも1～2時間多くなっていることがわかる．3時間程度が57%で全体の2分の1強を占めているが，4時間程度も17%あり，学生にとっては，かなり時間的負担の多い活動になっているようにも思われる．

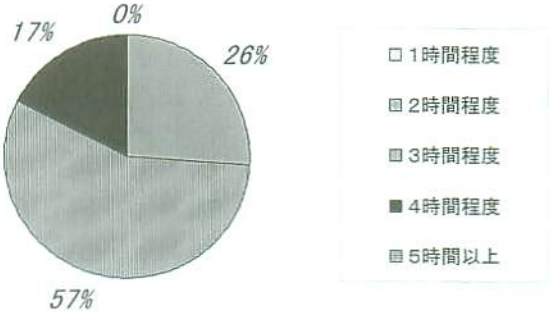

図5　総活動時間

図6は，ユア・フレンド活動の1ヶ月間における平均的活動回数を示したものである．3回が25%，4回が55%を占めている．また，5回以上が4%あるものの，多くの学生は週に1回程度活動している状況にある．活動回数が1回未満，1回，2回合わせて20%見られるが，これには，活動開始後，学生と児童生徒とのコミュニケーションがなかなかうまくいかず，活動の進展に困難さを感じている例も含まれている．

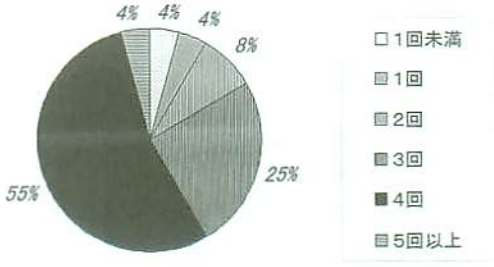

図6　1ヶ月の平均活動回数

図7は，ユア・フレンド活動を行っている場所についての結果である．「対象児童生徒の家庭」で活動している割合が46%で最も多く，次いで「学校のカウンセリングルーム」が23%を占めている．また，「学校の保健室」が12%，「熊本市教育センターの適応指

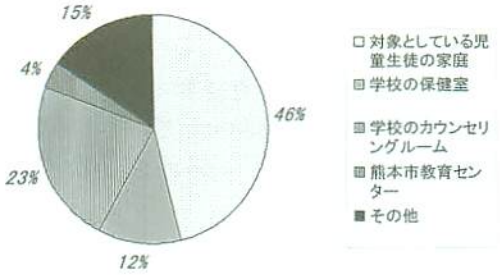

図7　ユア・フレンド活動をしている場所

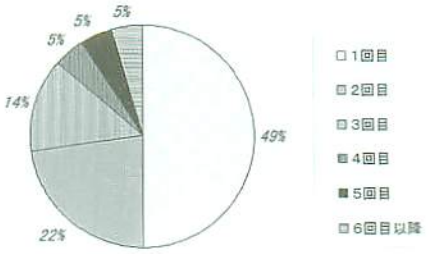

図9　活動開始後何回目から児童生徒がユア・フレンド活動を受け入れるようになったか

導教室」が4%,「その他」が15%であった.

図8には，学生側から見て，対象児童生徒はユア・フレンド活動を受け入れているかとの質問に対して得られた結果を示す.「喜んで受け入れている」と「受け入れている」が合わせて88%を占めており，多くの学生が児童生徒に受け入れられていると感じていることがわかる．学生のユア・フレンド活動は，不登校児童生徒への「共感」というよりも，感覚的に暖かく・優しく受け容れようと向き合う姿勢が児童生徒から評価されているように思われる．一方,「いやいやながら受け入れている」と「受け入れていない」という回答は得られなかったものの,「どちらとも言えない」や「わからない」との回答が12%ある．このことは，不登校の児童生徒に対して何らかの支援をしたいという思いが容易に伝わらず，この問題の難しさを示しているものと思われる.

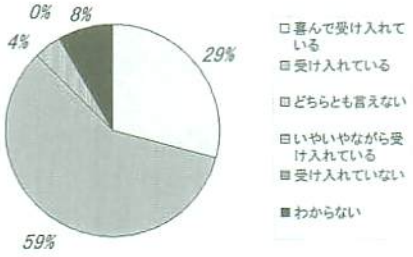

図8　児童生徒はユア・フレンド活動を受け入れているか

図8で,「受け入れられている」と回答した学生に対して，活動開始後何回目から受け入れられるようになったかという質問を行った．その結果を図9に示す．1回目との回答が49%あり，約半数の学生が活動開始後直ちに実際的活動に入ることができたようである．また，2回目が22%，3回目が14%であり，対象児童生徒の多くが活動開始3回目までにはユア・フレンド活動を受け入れていると思われた．4回目，5回目，6回目以降がそれぞれ5%であり，これら計15%の場合は，児童生徒にとって，この活動を容易には受け入れがたい状況にあることを示している.

対象児童生徒とのコミュニケーションについての回答結果を図10に示す.「非常にうまくいっている」と「かなりうまくいっている」が合わせて88%を占めており，多くの学生が児童生徒とうまくコミュニケーションがとれていると言える.「どちらとも言えない」,「なかなかうまくいかない」,「全くうまくいっていない」がいずれも4%であった．児童生徒とのコミュニケーションの成立は，ユア・フレンド活動の出発点でもある．図8において，児童生徒がユア・フレンド活動を受容しているか否かに対して，12%が肯定的でなかったが，その結果は，図10のコミュニケーションが容易でないとする割合と符合する．なお，会話以外で児童生徒とコミュニケーションを行う方法として,「ゲームをする」「キャッチボールをする」「絵を描く」「料理をする」「メールのやり取りをする」等を挙げており，学生一人一人が工夫しながら活動している様子が伺える.

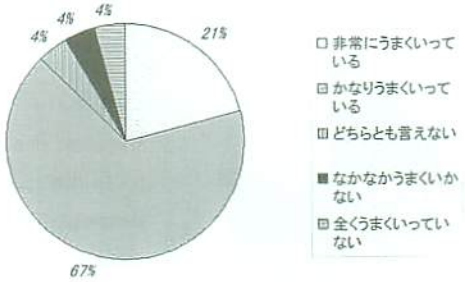

図10　児童生徒とのコミュニケーションについて

図11には，ユア・フレンド活動は有効か否かという質問に対する回答の結果を示す.「非常に有効である」と「かなり有効である」が合わせて62%あり，約3分の2の学生がこの活動の有効性を認めている．一方,「どちらとも言えない」が38%であり，この活動の難しさを感じている学生もかなりいることがわかった．前述したように，図8では，88%の学生がユア・フレンド活動は受け入れられているとみなしており，また，図10では,88%がコミュニケーションも良好であると答えている．それらに比べて，本図では，ユア・フレンド活動の有効性に関する評価は62%に低下しており，学生は比較的厳しく自己評価している

ように思われた．この活動の難しさは，以下に記す学生のコメントからも類推できる．「何回も会ううちにだんだん仲良くなれて，自分自身も児童生徒と会うことが楽しみになっているが，ただ遊びに行っているだけのようになっているので，それでいいのか少し不安」「その児童生徒にとってマイナスにはなっていないと思うが，プラスになっているかもわからない」「児童生徒がユア・フレンドをどのような位置づけでみているのかがいまいちよくわからない」等の意見があった．なお，「あまり有効でない」，「全く有効でない」という回答は無かった．

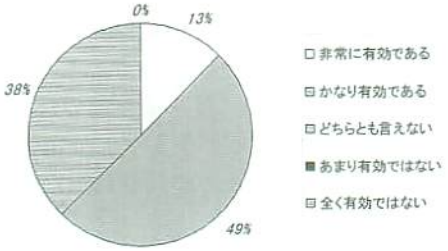

図 11　ユア・フレンド活動は有効か

ユア・フレンド活動に参加している学生の大多数は，教員の志望を明確にしており，この活動が将来の自分自身にとって役立つと考えていることが明らかになった．ユア・フレンド活動は，対象児童生徒への支援活動であるが，同時に学生自身にとっても有効な活動であると考えられた．特に，教員志望の学生にとって，不登校問題は今後学校現場で教育活動を行っていく際に，重要な課題になるものと受け止めていると思われる．

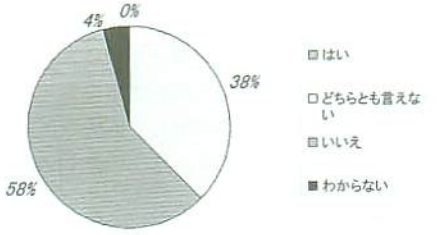

図 12　ユア・フレンド活動を大学の授業とすべきか

ユア・フレンド活動を大学の授業の一つとするべきか否かについての質問に対する回答の結果を図 12 に示す．「はい」と回答した学生はおらず，「どちらとも言えない」，「わからない」が合わせて 42%，「いいえ」が 58% という結果であった．過半数の学生にとって，ユア・フレンド活動は単位取得よりもボランティアとしての価値を認めているように思われた．

また，今後，ユア・フレンド活動を充実・改善していくためには，どのようなことが必要かという質問に対して，学生から次のコメントが寄せられた．「学校・家庭のユア・フレンドに対する理解を十分に得ること」「学校・家庭との連携のとり方をもっとうまくできるようにする」「メールや電子掲示板などを利用して，日頃からユア・フレンド同士で意見や悩みなどを話し合う機会を持ちたい」「男子学生の参加がもっと必要である」

他に，ユア・フレンド活動を体験して気がついたことや感想等を以下に示す．

「子どもと信頼関係を築けていけたことが嬉しかった」「話を聞くだけで，何も改善策を取れないのが心苦しい」「子どもを理解する方法がたくさんあることを知りました」「本当にどんな子どもでも不登校になってしまうという現実を感じた」「だんだん仲良くなれ，会うのが楽しみになってきている．けれども，本当に遊びに行っているだけのようになっているので，これでいいのか少し不安」「自分自身の成長となっている」

大学教育の観点から，本事業について附言する．教員養成系の大学教育においては，学生が児童生徒と接する教育活動として教育実習がある．そこでは，教科の授業を行うことが中心的活動となる。学級経営等の経験もすることにはなるが，不登校の児童生徒と接することは皆無と言えよう．従って，不登校問題に対する臨床的な実践は，大学教育の中では，極めて少ないのが現状である．一方，教員に採用され，例えば，中学校のクラス担任になったときには，不登校生徒が必ずや存在し，その課題に直面せざるを得ない状況にある．然るに，ユア・フレンド活動を通して，不登校児童生徒と向き合うことは，不登校の状況に置かれた児童生徒を理解し，同時にその接し方の基本などを学ぶことにつながるため，教員としての資質能力を高める上でも貴重な学習機会になっているものと考えられる．

4. 不登校児童生徒へのネット支援活動

不登校問題の対策を考える際に，その背後にある要因・背景と，不登校を引き起こすことになった直接のきっかけ等を整理してとらえると共に，その対応にあたっては，不登校児童生徒やその保護者等の状況や支援のニーズへ配慮した上で，効果的な対策を講じることが求められる．

不登校は，「学校に行きたいけれども行けない」等の心の問題としてとらえられることが多いようであるが，あそび・非行による怠学，LD，ADHD 等による不適応，病気，虐待等を要因としたものも含まれ，不登校対策はそれらの多様な実態を視野に入れたもので

なければならない．多様な要因や背景のある不登校を一括りに扱い，論じることは問題であり，個々の要因に応じた適切な対応策が求められる．[9]

一方，不登校児童生徒への支援活動として，インターネットを活用することは，比較的新しい分野であるｅ－ラーニングの進展とも関連し，期待できるものと思われる．インターネットによる支援・相談[10,11]は，一般的にある種の無名性，匿名性が保障される他，地域的・身体的・経済的・時間的にカウンセリングを受けにくい者に，そのハンディを克服する機会を提供できるなどの特徴がある．また，このような支援活動の在り方としては，電子メールの持つ書記的な方法が，相談する者に自分自身と問題との関係について整理させ，自己洞察を自然に導き出す作用に優れた影響力をもたらすといった効果があることなど，専門家によるカウンセリングとして行うことができると思われる．対面ではなくコミュニケーションを図ることができることや，電子メール特有の感情表現の仕方が，人間関係の結びつきを強くする等が指摘できよう．従って，今後の不登校児童生徒への支援方法の一つになるものと考えられる．

前述したように，ユア・フレンド活動は，週１回２時間程度のペースで行われている．しかし，長期にわたる活動であり，学生にとっては，この間試験，レポート作成，卒論等，かなり多忙な時期も含まれている．また，活動の総時間が４時間以上になる学生も17%いることから，学生にとって，かなり負担のある活動となっているように思われる．従って，ユア・フレンド活動を補完する意味でも，今後，インターネットを使った新たなコミュニケーションスキルをユア・フレンド活動に取り入れていくことが必要であると考える．

5．結　　言

本研究では，不登校対策支援として，熊本大学教育学部と熊本市教育委員会が連携し，平成14年度より進めているユア・フレンド活動の現状と評価についてアンケート調査を行い，その結果の分析・考察を行った．さらに，これからの不登校支援活動として注目されるインターネットの活用等について言及した．

得たる結果を要約すると，次のごとくなる．

(1) ユア・フレンド活動は不登校の児童生徒にとって「非常に有効である」「かなり有効である」とした学校が82%に達しており，この活動の有効性を多くの小・中学校が評価している．また，児童生徒の保護者はユア・フレンド活動を「高く評価している」「かなり評価している」とした学校は合わせて72%であり，多くの保護者はこの活動に対して一定の評価をしているものと思われる．さらに，ユア・フレンド活動に参加している学生についても，約３分の２の学生がこの活動の有効性を認めているなど，これからの不登校支援対策として有益な活動であると考えられた．

(2) ユア・フレンド活動の中で，児童生徒とのコミュニケーションが「うまくいっている」と感じている学生と，ユア・フレンド活動が児童生徒に「受け入れられている」と感じている学生の割合は類似であり，児童生徒と適切なコミュニケーションがとれている学生は，児童生徒と良好な関係を築いているようである．

(3) ユア・フレンド活動に要する時間の合計が，１回の活動につき４時間程度かかる学生が17%おり，一部の学生にとって，かなり時間的負担が多いように思われる．

(4) 今後のユア・フレンド活動の新たな展開としてインターネットを用いることは有効であると考えられる．

(5) 学生が，ユア・フレンド活動を通して，不登校児童生徒と向き合うことは，不登校の状況に置かれた児童生徒を理解し，同時にその接し方の基本などを学ぶことにつながるため，教員としての資質能力を高める上でも貴重な学習機会になっているものと考える．

参考文献

1) 文部科学省：平成15年度学校基本調査速報，2003.
2) 文部科学省：平成14年度学校基本調査，2003.
3) 河合隼雄：不登校，金剛出版，1999.
4) 福井大学教育地域科学部：ライフパートナー活動報告書，2001-2004.
5) 小林正幸他７名：学校における大学院生による学校不適応児の援助に関する研究――学習指導補助制度の効果と限界――東京学芸大学附属教育実践総合センター研究紀要，第23集，pp.75-87，1999.
6) 熊本市教育委員会：平成14年度ユア・フレンド事業報告書，2003.
7) 辻野智二・大迫靖雄：不登校児童生徒への支援事業に関する実践事例――地域と連携したユア・フレンド事業の推進――，日本教育大学協会2003年度研究集会発表概要集，pp.89-90，2003.
8) 辻野智二・大迫靖雄・水山博・堀川治城・河上強・三原悟：不登校児童生徒への支援事業に関する実践事例――ユア・フレンド事業の現状と評価――，2003年度日本教育大学協会研究集会報告書，pp.141-

144, 2003.
9) 文部科学省：今後の不登校への対応の在り方について（報告），2003.
10) 小林正幸・野呂文行・仲田洋子・大畠みどり：電子メール相談による不登校児および関係者支援に関する研究――1年間で新規受理した相談事例の分析――，東京学芸大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要　第25集，pp.31-43，2001.
11) 小林正幸：不登校児の理解と援助――問題解決と予防のコツ――，金剛出版，2003.